

古平町役場総務課
842-2181(公)
平成20年1月1日

年表で読む 古平の歴史

[125]

商工業 ⑪

◆株式会社小樽銀行

古平支店となる

明治三〇年十二月、資本金総額五十万円、株式の総数一万株、一株の金額五十円、払込金額二十万円とし、社名を株式会社小樽銀行と改称し、支店名、本店営業所を次のように変更した。

社名

株式会社小樽銀行

本店営業所

後志国高島郡色内町三番地

明治三二年、臨時総会の決議により、取締役をこれまでの四名から六名に変更したが、このとき頭取にな

つた添田弼は小樽外六郡の郡長であつた。

頭取 添田 弼

道吏員、函館区長、増毛郡長

副頭取 猪股安之丞

取締役 海産物・魚網・太物商、醸造業

同 林長左衛門 漁業

同 高野源之助

商業、回漕業

同 中村源兵衛 漁業

古平支店はそのまま現在地に存続した。小樽銀行の株主二六六名中、古平の株主は四〇名おり、持株は六七四株あり、その金額は三三、七〇〇円であつた。

明治三一年から古平支店は町税納入の窓口となり、税金を取り扱

うようになった。

小樽銀行古平支店は、明治三五年一月、港町から新地町に移転したが、四月、美国町に古平支店美国派出所を開設した。

小樽銀行は明治三六年一〇年、本店を小樽市色内町に移し、払込済資本金の総額が五〇万円となり、三六年度の前期利益配当は六分であつた。支店は岩内・余市・古平・増毛に置いた。

明治三七年二月、日露戦争が起きると国債の募集を始め、この取り扱いのため古平支店内に、日本銀行小樽出張所臨時派出所が置かれ、戦争の終る翌年まで続いた。

◆株式会社北海道銀行 古平支店と改称

明治三九年、株式会社小樽銀行は一月の総会の決議により五月、株式会社北海道商業銀行(元屯田銀行と合併)と合併し、株式会社北海道銀行と改称した。

資本金も七五万円と増額され、支店も札幌・岩見沢・旭川・稚内・増毛・余市・古平・岩内・磯谷・江差・室蘭の一一か所、美国・浜益に派出所を置いた。

また日本銀行の代理店として国債などの取り扱いもし、支店数は本道では最大の銀行となつた。

小樽銀行頭取であつた添田弼は、道庁設置以前から官吏として勤め、各地で郡長としての実績をあげ、人望もあつた。経済界に入つて実業家としてもその学識と手腕は高く評価されていて、北海道銀行となつてからも専務に任ぜられた。

← 北海道銀行の広告 (明治三九年・小樽便覧)

支店所在地	一 札幌 岩見沢 旭川 稚内 増毛 磯谷 岩内 余市 古平 室蘭 江差
派出員所在地	函館 小樽 旭川 岩見沢 稚内 室蘭 日本銀行代理店 小樽 札幌 室蘭 岩内 江差
北海道金庫取扱店	小樽 旭川 岩見沢 稚内 室蘭
小樽區色内町七番地	小樽 旭川 岩見沢 稚内 室蘭
會社 北海道銀行	取 締 役 國田 實徳 取 締 役 本郷嘉之助 監 査 役 小寺芳次郎 監 査 役 本間賢次郎 監 査 役 中村源兵衛 監 査 役 白鳥 永作 同 澤口良藏

この合併により古平町は、基本財産造成費などの預け入れ先を、諮問に對し次のように決定した。

基本財産造成及び管理規則第五條の銀行は、三井銀行または北海道銀行とす

明治三十九年七月三十日

古平町長 宮下羊太郎

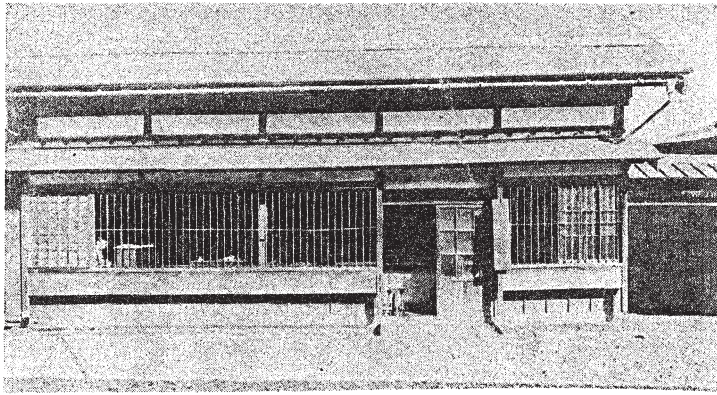
右の通り決定す

明治三十九年七月二十日

古平町会議員 菊池末五郎

渡辺 宗作

← 新地町・(株)北海道銀行古平支店



◇無限責任大典記念 古平信用組合創立

大正四年、古平町同志倶楽部の公益会が順調な成績を収めたことから、産業組合を設立するため、町民に次のような趣意書を配布し、参加を求め、各戸の勧誘に当たった。

趣 意 書

今秋御奉行あらせらるべき御即位式大典は実に千載一遇の御盛事にして、これを奉祝し、且つ之を記念せんがため、各地団体又は個人に於いて、種々の事業を企図し、既に実行せるもあり、本町においても数種の施設事業を企てられ、かつ一般目論見を募集せられたりと雖も、産業組合設立の計画あるを聞かず、抑も産業組合は、政府において大に其の設立を奨励し、かつ其の發達を奨励せんがため、法律に拠り、種々の特典を与えられ、而して本道における、産業組合の設立数既に百二十を超え、なお多数設立せんとする趨勢なるに、未だ本町に組合の設立を見ざるは遺憾とする所なり、茲において之を大典記念として信用組合を設立せしむるは、最も適切

なるものと信ず、幸に大方諸彦の賛同を得ば、不省等發起人の本懐之に過ぎざるのみならず、之が設立の暁は、自他共に其の有益なる結果を招来することを想到し得べし、組合設立の上は、不肖等其の職に在ると否とに關せず、献身的努力を致し組合の發展を期せんとす。

大正四年九月六日

發起人

石井豊太郎・石河 耕作

原田吉太郎・米田 岩吉

梅野吉太郎・寿原要太郎

九月、梅野吉太郎外百五十一人連署し、申請書を提出し、次の指令書のとおり許可になった。

北海道古平郡古平町大字浜町

商業 梅野吉太郎

外老百五十一名

大正四年九月二十七日付申請無限責任大典記念古平信用組合設立の件許可す

大正四年九月二十二日

北海道庁長官 俵 孫一

この指令に基づき信用組合は、次のように設立登記した

一、名称 無限責任大典記念

古平信用組合

二、組織 無限責任

三、事務所 古平郡古平町大字 浜町六十三番地

四、目的 組合員の産業に必要なる資金を貸付し及貯金の便宜を得せしむ

五、設立許可の年月日 大正四年十月二十一日

六、出資一口の金額 金貳拾円

七、出資払込の方法 出資第一回の払込金額は一口三円とし、第一

回後の出資払込は配当すべき剰余金より払込に充つるものの外、出資一口毎に毎年六月末日金八円五十銭宛払込むものとす

但し組合員の都合に依り定額以上の金額を払込むも妨げなし

八、理事の氏名住所 古平郡古平町大字浜町

梅野吉太郎

同 寿原要太郎

同 米田 岩吉

九、監事の氏名住所 古平郡古平町大字浜町

石河 耕作

同 石井豊太郎

十、存立時期 満二十箇年

右大正四年十一月二十日登記

小樽区裁判所古平出張所

(続 く)

昭和三年 続

▼五月一〇日

昨夜九時頃、妻が就寝中少し産気づいたから、朝までに分娩するかもしれないと言っていたが、夜明け頃にだんだん近くなつたので、ちょうど熊さんが来ていたので、五時頃、産婆さんを迎えに行つてもらう。産婆さんは早速来てくれた。妻は朝食の支度をして、りして六時半頃に起きていたが、七時頃急に軽々と安産した。意外なほど軽いお産であつた。すぐ本や、支店のおつかさん方が来てくれた。目方七三〇匁で男子だつた。トミ子は今度こそ女だと自分で名前まで決めていたのでガツカリしている。こればかりは如何とも仕方ない。夜、竹の孫さん一二歳で亡くなり父がお悔やみに行く。

▼五月一一日

起床六時、妻は昨朝出産したがその後経過もよろしく、母子共に壮健で何よりだ。熊さんは馬耕屋さんが来ていて農園行き。正治は今まで母ちゃんに抱かれて休んでいたが、昨晚から私と休ん

だがダハンせず機嫌よい。港町姉上來られ、安産に喜んでしばらく話しをした。夜、本主人が見舞いに來られてしばらく話して帰る。支那で動乱があり三師団と六師団が出兵、七師団からも三ケ中隊が今日出征した。

▼五月一二日

今朝は早起きして農園へ行くべく心がけていたので、四時半に起

の部屋に飾り、トキシラズは中庭に植えた。朝食後、熊さんと裏に花種をまく。妻は産後の肥立ちがよろしく平素の通りだ。産婆さんが来てお湯をつかつてくれる。夜、本へ行きいろいろ話をする。浅岡古平町長が辞職勧告をされたとのこと。電灯料値下げ問題で部落会長連が会社へ交渉に行く。

高野名事作さんの日記から
当時の世相を見る

(132)

▼五月一三日

起床五時、今日も早起き、洗面早々農園行き。グスベリ、シヤクヤクの根回しやら桐の枝切りをし、帰りは長吉、その他の畑を見て八時帰る。中庭にトキシラズを植える。今日は日曜日なので、子供らが赤ちゃんの湯をつかうのを見てとて妻の部屋に來ている。妻も至極壮健で何よりだ。午後からト

ミ子、悦三、四郎らは農園へ行き、フキ、ヨモギなどをとり、畑でイモを煮て食べた。五時頃帰る。夜、支店の湯に行く。

▼五月一四日

起床六時、洗面後早々に自転車、天竺ボタンの根を買いに畑の池田まで行つたが途中で行き会い、一株五錢と一〇錢のを五つ買う。四、五日前裏に植えたダリヤが芽を出した、根の切り方の悪いのはダメだつた。本年はよい経験をした、明年は囲い方も切り方も上手にやろう。何でも失敗してわかるのだ。裏の畑を掘りダリヤを本植えた。昨晚から雨が降り今日も時々降る。今日は妻の果上がり、姉やコノさんが来て、オハギ、うどんなどの馳走をつくる。昼頃、十、久の店員が来て昼食を出す。夜、本主人のところへ見舞いに行く、一日増しに良い、二十日頃には所得税會議で小樽へ出られるとのことだ。支店主人は午前六時一〇分発の自動車で余市へ行き、小樽へ用達に出かけ、七時に古平へ自動車で帰つたとのこと、便利になったものだ。

▼五月一日

今日は祝聖会の例会日、三時四〇分に起床、洗面早々に出かける、早薄明になつてゐる。寺に着いたのは二人目だ。四時一〇分から読経が始まり五時に終わる。寒中からみれば楽になった。朝の景色は特によい。例の通り和尚の部屋で時事などを談じながら六時半帰る。熊さんは午前中通帳配り、午後から農園行き。私も農園へ行き池の周りのスイレン、シヨウブの植え替えなどをやり、ダリヤ、水仙、グラジオラスの植え付けをやり、草取りやこやしをくれる。コノさんらも来てイチゴ畑の草取りやこやしをやる。この頃は仕事にもよい気候だ。八重桜が赤白共に少し咲きかけた。一七、八日頃は満開ならん、サクランボは満開、今年もたくさん花が咲いている。子供らは明日遠足として支度に大喜びだ。

▼五月二日

起床六時、今日は学校の遠足で子供らは大喜びだ。五時頃から起きてオニギリとか何とか支度に忙しい。七時頃三人とも勇んで出かけた。四郎と正治も遠

足するとしてオニギリを風呂敷に包み、戸外に持つていつて遊んでいる。午前八時頃②曾我まで行く、姉さんが不快で小樽病院へ行ったとのこと、赤子を置いて行つたので困るだろう。病氣は一番困る。私たちは妻も子供も壮健で幸福を感謝せねばならぬ。八から大謀用のロープの注文を受ける。帰り③に寄り話をして正午帰る。遠足は悦三は群来村まで行つたとして一時頃帰る。トミ子は湯内まで、吉治はダンゴ茶屋辺りまで行き四時帰る。ダシ風が吹き五時頃から雨になる。古平町議来る三一日改選されるにつき、候補者の噂がポツポツある。

▼五月二日

起床六時、曇天だが寒空だ。熊さんは農園を休んでいろいろ家の片付けなどする。正午頃から暴風になり時々アラレが降る、気候不順なことだ。コタツにあたりたい程だ。美国④さんが来ていろいろ話す。掛け金二七〇円受け取る。四月末の見込みでは貸し方三分か四分の見込みと思つていたが、この分だと七分ぐらいは入金するかも知れぬ。沖は時

化なのか汽船三隻が停泊している。この頃積丹から余市まで自動車運転しているので実に便利になった。従つて船は打撃だとのこと。何の商売でも安全ということではできない。エビス倉まで行く。校庭の桜がきれいに咲いている、ほかの樹木も生長してよい庭だ。夜、大鶴間に行き一〇時帰る。一条通りを除くほかはみな街灯を消しているのさびしい。この寒さとアラレで、サクランボの花にさわりがないかと心配している。

▼五月八日

起床五時、洗面後早々に運動かたがた農園へ行く。サクランボは花盛りだ、昨日のあらしで満開の花にさわりがないか心配していたが、どうやら花の具合はよい。桜の赤八重はまだ開かぬが白八重は満開、昨日のあらしで少ししおれたのがある。花畑などを見回る。チューリップは余り早く雪解けになつたのかえつて昨年より元気がない。何でも経験してみねば分からねものだ。桜の枝をとり六時半帰る。今日も寒い日だ。掛け金がポツポツ入る。今日

も一五〇余円入金した。

▼五月九日

起床六時、熊さんは蒔きつけをやっている。妻は産後の肥立ちよろしく一日増しに壮健になる。この頃は寒い天氣が続く、今日などは五五度⑤寒いはずだ。気候不順のためかカゼがはやつている。赤児の名前がまだ決まらぬ、二週間以内に届ければよいからそれまでに考えよう。午後三時頃農園へ行く。熊さん、コノさんが豆蒔きをやっている。チャボアヤメの蕾がふくらんだので、二株鉢植えするべく持ち帰る。

▼五月二十日

今日は衛生掃除をするべく早く起きた。コノさん、傘ヨシさんが手伝いに来てくれた。店の方から先にやるがなかなか忙しい、午後から風が吹き時々小雨が降つたが大したこともなかった。店と台所だけをようやく終えた、茶の間から奥座敷は明日やることにした、ずいぶん疲れた。去る一〇日出産の赤児、久と命名し届けることにした。

▼五月二二日

起床六時今日は一天雲なき上

天気、衛生掃除には申し分ない日だ、昨日の残り茶の間、ほか三室の掃除をする。畳を出し叩いてから入れるやらなかなか忙しい。天気が良いので昨日のように心配することなくできる。正午まで終わる。この天気なので午後半日遊びかたがたタケノコ採りに行く、私と熊さん、木の三人で一時頃から行く。暑からず寒からず実に気持ちよい時季だ。ブラブラ歩いたが水田がずいぶん多く出来た。小野寺さんの裏から山へ入る。タケノコはポツポツ見えるがまだ小さいようだ、二四、五日にはちょうどよいだろう。帰り①公園へ寄ったが、しばらく見ないうちに樹木も多く生育もよい。八重桜が盛りできれいだ、フジがたくさん蕾をつけている。池の水もいっぱいで気晴らしに良いところだ。五時半帰る、今日はよい運動になった。夜、支店の風呂に行き心地よく休む。

▼五月二二日

昨夜来の雨は今朝まで降り続く、春雨の音を聞きながら休んでいると気ものんびりと心も休まる。熊さんは畑仕事ができない

ので、午後から沖村へ目録配りに行く。雨も午後から晴れたが寒い天気だ。気候が不順なのでカゼひきが多い。正治が二、三日前から不快のところ今日ハシカで顔一面に発疹が出た。古平、余市間の自動車も定時運転をし客はあるようだ。掛け金もポツポツ入金する。今月始めの予想では、この不漁で二、三割の入金と思つていたが七、八割は入金したようだ。心配した程でもなかったようだ。昨夜、イワシ初漁に出て五、六〇尾とれたとて初物を五尾もらう。

▼五月二三日

起床六時、洗面後裏の花畑に水をやる、チャボアヤマが花盛りになった。八時から衛生検査があるので、②へ集まり、九時から七人連れで歩く。この頃はどこも掃除で忙しく皆丁寧にやっている。昼はピヤホールでそばを食べることにした。一時半からまた歩いた、二時半頃に終わる。後かねて松井さんから聞いていた造田を見るべく自転車で行く、あちこちでたくさん造田している。帰りススキナイの杉山を見て回る。ブドウ

つるなどを切りワラビを採って帰る。今頃の山行きは気も清々する。松も大きくなった。灌漑溝工事も盛んにやっている。五時半帰る。③滝谷さん来られいろいろ話し昼食を出す。九時頃帰られる。

▼五月二四日

起床六時、日本晴れの好天気、暑からず寒からずで一番気持ちが良いときだ。熊さんは早くから農園行き、蒔きものに忙しい。正治はハシカでダンして困る。悦三も一昨日から様子がおかしかつたが今日出たので学校を休む。四郎にも出てきたようだという。悦三に三人が出た。悦三は年が上なだけに静かに休んでいる。浜へ出て見たら上ナギだ。自動車で余市へ行く客が待っている。この天気なら機船の方が楽だろう。今年の網はホッケが大漁、コナゴ巻網も目下大漁だとのこと。夜、父は宗右衛門の娘さんの通夜に行く。④曾我の姉さん不快にて小樽病院へ入院中とのこと、今日の電話では良くないから来てくれとのこと、一時半の自動車で行った。なかなか心配なことだ。イワシ網

は昨夜三、四箱とれたとのこと。夜九時頃、⑤から電話があり、⑥の姉さんが亡くなったとのこと、気の毒なことだ。早速⑦へ行く。

▼五月二五日

昨夜小樽から⑧曾我の姉さん死亡との電話があり、その後の電話では、午前二時頃共栄丸で出発し六時頃古平へ着くので、店の片付けを頼むとのことなので、就寝中だったが二時頃起きて、木、田、古島、困兄さんらと店の片付けに行く。小間物類でなかなか手間取る。三時半頃に夜が明け五時過ぎにようやく終わる。六時頃共栄丸が着いたので熊さん、父も浜へ行く。私は昨夜から一睡もしていないので少しフラフラする。家では三人がハシカなので妻もゆるくない。明後日にもなれば少しは楽になるだろう。夜、⑨へ行きお参りして九時頃帰り休む。

▼五月二六日

起床五時、昨夜はよく休んだので今朝の気分はよろしい。朝の運動かたがた農園へ行く。八重桜三種類とも満開できれいだ、少し

開き過ぎたぐらいいだ。二二、三日あたりが見頃であつたか。チャボアヤメもきれいに咲いている。今日は四月八日のお寺参りで家ではオハギの馳走がある。②で入棺するので午後から行く。熊さんも手伝いに行く。雨が降り出す。夜②の通夜に行く、大勢の人であつた。九時頃終りいろいろ話して一二時帰る。

▼五月二七日

起床六時、昨夜来の雨も今晩ようやく晴れた。畑作物にはよい雨であつた。②の葬儀八時半なので行く。一〇時ちょうど出棺、三人の幼児を残して逝かれるとあとの者は実に困る。子供らが可哀想だ。正午帰って昼食をする、トミ子は日曜日なので、友達と④公園まで三ギリメシを持って遊びに行く。ハシカの方は正治と四郎は良くなつたが、悦三はまだ熱があり休んでいる。四時頃骨拾いに行く。また雨が降り出し梅雨のような空模様だ。鹿鉾になつていた稲倉石鉾山、今回試掘することになり来月から作業が始まるとのこと。

▼五月二八日

起床六時、熊さんは今日も②の後片付けの手伝いに行く。四郎、正治はハシカの方も良くなり元気良く遊んでいる。悦三は熱が高四〇度もあり、床についたきりだ。妻も産後の日が浅いのでなかなか困る。午後から③の骨納めでお寺参りする。夜、②へ話しに行く。忠さん、仙吉さん、本間さんらもいて一〇時頃まで話を帰る。町議選の文書戦なかなか忙しい。

立候補者は次の二二名。

山口、斉藤兼、種田健之丞、種田豊太、松座、藤沢、本間愛蔵、小林栄吉、外内、原田喜助、斉藤林蔵、梅野、田中吉太郎、横山隆起、湯田、本間礼太郎、八反田長太郎、八反田寅吉、大沢、田岸藤吉、山田常次郎

▼五月二九日

朝のうちは天気であつたが一〇時頃から曇天、入梅のようだ。洗面早々浜へ出て見る。本陣の浜は賑やか、聞けばイワシー〇玉以上もとれたとのことだ。これから本漁になるだろう。悦三のハシカなかなか良くならぬ。近藤さんから見てもらう。午後から小

雨降り出す、今日は斤商の運動会、ずいぶん盛んな催しと聞か、この小雨さわりがいいか如何。

▼五月三〇日

起床六時、未明から大雨が降り出したが七時頃になつて晴れた。農家にはよい雨であつた。熊さんは集金に出かけた。春の様子から三割ぐらいより入金せぬだろうと思つていたが、この分なら七割ぐらいは入金するだろう。悦三の熱が四〇度近く妻も手放しできぬ。四郎、正治は機嫌よくなつた。②初七日で仏参に行く。町議選もいよいよ明日に迫り、文書戦、ビラ張りなど混戦だ。今夜新地町で種田豊太演説会、正隆寺では横山隆起の演説がある。十二夜の月光が輝いている。囚姉さん危篤とのこと。

▼五月三一日

昨夜、悦三が熱がありカアチャン、カアチャンと言うので私も一、二時頃から起き、四時頃まで看護する。今日は月末、熊さんは午前中集金に出かける。午後から久し振りで農園行き。帰つてから熊さんの話ではリンゴの花がきれいに咲いているとのこと。チュー

リップも花盛りなのに、どこの者が手折つて持つて行つたのがいるとのこと、悪い人もいるものだ。悦三、近藤さんの診断ではチブスの疑いがあるとのこと、明日まで待つてみることにした。この日、幸治に頼んでおいたバナナ、カステラ、体温計が勇丸で来た。この夜九時四〇分頃、急に戸外で火事だと騒ぐ声、沢江の川の近くだ、駆けつけて見たら間もなくガソリンポンプ車が来て二戸で消し止めた。無風なのがよかつたが子供が三人焼死した。実に残念の極みだ。七歳の女の子、一〇歳と一四歳の男の子である。

▼六月一日

祝聖会の例会日、三時半に目が覚めた。悦三は昨夜来セキが出て熱もありませんなかな寝つけない、妻は看護にゆるくない。洗面早々お寺へ行く、一番であつた。和尚さんは昨夜の沢江の悲惨な火事のこと知らなんだとのこと。実際可哀想なことをした。何れも小学生とのこと。四時から読経が始まり五時に終わる。お寺の八重桜七分通り散り、玄関の辺りは花吹雪のように積もつてい

る。例の通り和尚の部屋で昨夜の火事の話と、町議選の話でもちきりだ。六時半帰る。近藤さんから診察してもらったらチブスとのこと、困ったものだ。今日もセキが出る。念のため蓮実さんにも診察してもらったら肺炎とのこと。何れを信じてよいか迷う。午後また近藤さんを頼み診察してもらう、チブスの届けをするとのこと、港町の姉は看護やその他のことのできる世話してくれる。

▼六月二日

起床五時、悦三の病氣のことで家の中は何やかにやと混雑している。病氣も今のところ判然とせぬので困る。姉も来て手伝つくれる。悦三はコワイ、腹いたい、カーチャンなどと言うのでゆるくない。妻は産後の肥立ちが浅いので案じている。困さんへ来ていた看護婦さんが五時頃から来てくれる。本職だけに手際よくいろいろと世話をしてくれる。夜、梅野さんで部落会の役員会がある。街灯が今まで一三本のところ五本に減らすことに決まった。いろいろ話一〇時に帰る。

▼六月三日

昨日から看護婦さんが来てくれたので、手当てをするにも都合がよい。悦三はコワイとか腹が痛いとか言っている。今日で一〇日程も熱が高く、牛乳と重湯ぐらいのものだから衰弱しているようだ。出来るだけ手をつくしてみなければならぬ。一日中病人のことで何やら取り込んでいる。

▼六月四日

起床六時、悦三の病氣のため何かと心せわしい。昨夜は看護婦さんが付き切りでみてくれた。今朝も熱が四〇度近くある、日中も三九度を下がらない。咳を休みなくするので疲れる。蓮実さん、近藤さんから見てもらうが、何が病氣源なのか分からぬ。「ヨ」の老母も見舞いに来てくれた。イワシ漁の頃思わしくない、ほんの玉か二玉あてぐらい。何とか大漁でありたいもの。浅岡町長、いよいよ明日古平を出発するにつき挨拶に歩く。夜に入り雨が降る。この頃浜町の風呂屋が休みなで不便なことだ。

▼六月五日

起床六時、昨夜は看護婦さんが疲れていて一〇時頃休み、妻

が悦三の看護をする。昨晚は割りりとよく眠っていたとのこと。六時に熱を測ったら三七度五分ぐらいに下がり、咳も少なくなつて気分もよろしいようだ。七時、浅岡町長が発発するので浜まで見送りする。何かにと問題が起きたが誰が来ても円満にいかぬ。とにかく昨年は古平町役場庁舎も完成し、鉄道、道路の問題にも大いに奔走されたこともあり、町民は感謝して見送らねばならぬ。大阪おじさん、「ヨ」主人も見舞いに来てくれる。熊さんは午後から農園行き、キャベツの植え付けの準備をする。夜、酒井かじ屋の一〇歳と二歳の女の子が死亡、可哀想なことだ、通夜に行く。

▼六月六日

起床六時、洗面後早々に二階の悦三の様子を聞く。熱も三七度五分となり咳も少なくなり、楽に休んだという。日増しに良くなるので安心した。看護婦さんも熱心によってくれている。食後、四郎、正治を連れて浜へ行く。イワシ漁が無いのでさびしい。まだ海水浴には早い、あと一か月もすれば浜も賑やかになるだ

ろう。午後四時頃、久し振りに農園行き。桐が花盛り、ドングイが五寸も伸び草もひどくなつた。花畑の草取りをする。忘れな草、キキョウ、オダマキなどをとって六時頃帰る。リンゴの花も散りかけている。ス虫がたくさん見える。夜久し振りで、支店の湯を呼ばれて行く。星が満天に輝き良い夜だ。この頃はフキ、ワラビ採りが盛んだ、私も一度行きたいものだ。酒井かじ屋の子供の葬式送りに行く。

▼六月七日

起床六時、天気快晴。畳屋さんが来る。イワシ漁が無くさびしい。悦三の容態日増しによろしい、体温も三七度二、三度に下がり、コワイ、腹イタイも言わなくなり、この分なら大丈夫だ、安心した。この頃はフキ、ワラビ採りに随分行く。午後二時頃、共栄丸で石井泰治さん、南洋へ行くとして出発された。私も浜まで見送る。南洋といえは随分遠いが遙かに成功を祈る。熊さんは農園にス虫がたくさん出て虫取りに行く。夜は看護婦さんに代わり悦三の部屋で休む。―― 続く――

S町内の学校探訪S

6

古平小学校

◇第一回卒業生

古平尋常高等小学校と改称し、修業年限三五年となった高等科の最初の卒業生は五名だったといわれているが、これは学籍簿なども焼失したことから確認できない。

同窓会名簿によると、同級生として次の者の氏名があるが、卒業までに転校した者もいたのではないかと考えられる。

▼第一回卒業生

梅野吉太郎・宮崎彦蔵・高野豊吉・寺田治策・向井亀昭 以上五名

同窓会名簿にある同級生

本間礼太郎・幾井誠七・笠谷栄吉・可児徳太郎・田中慶一・能登清太郎・平泉与七・池田寿三郎・吉田熊

太郎・田畑善太郎・千広政江

以上十一名、この中で千広政江はただ一人の女生徒であった。

▼第二回卒業生は八幡平太郎ただ一人といわれているが、男子一八名・女子六名が同じように同窓会名簿にある。

▼第三回卒業生についても、同窓会名簿では男子三〇名・女子二名とあるが、卒業生として原田吉太郎一名の名前のみが伝えられている。

同級生には浜口初太郎(日露戦争で戦死・阿波繁治(歌人)・堀由次郎(消防部長)・桐沢定吉(町議会議員)・関口道三郎(古平郵便局長)らの名前がある。

◇渡辺校長が表彰

明治三十一年、浜中尋常高等小学校に任命された渡辺永助校長(第三代)は、校長としてたまたま勤務した学校が四学級編成の複式学級であった。面積が広く、人口の少ない北海道では複式・単級といった学校が多かったことから、単級・複式教育についての研究が重要であることを痛感し、その研究に当たろうと考えた。

そして、単級・複式学級の授業方法を自ら実践しながら研究に取り組み、また新しい計数器を発明し、それを利用した授業の実践例などを発表して、道内の教育現場に大きな反響をよんだ。

これらについては「北海道開拓功労者関係収録」や「文化の黎明・下」などに収録された。

◇浜中尋常高等小学校増築

明治三〇年になり就学児童数が増加したことから、また校舎を増築しなければならなくなった。しかし、

本校		浜中小學校		計
學年	男	女		
尋常科一年	三三	二三	五六	計
同二年	二九	四	三三	
同三年	三一	一二	四三	
同四年	二〇	五	二五	
溫習科	五四	一六	七〇	計
計	一六七	六〇	二二七	
分校				
新地分校	一一	五四	一六五	計
群來分校	一八	五	二三	
沢江分校	四五	一一	五六	
沖分校	五五	九	六四	
計	二二九	七九	三〇八	通計
計	三九六	一三九	五三五	

戸長役場(※)の予算は前年の二倍近くになっていて、税の賦課額は八千円を超えていることから、これ以上増税することはとても困難なことであった。

そこで菅谷戸長は、郡内からの寄付金によって増築する案を各戸長役場の総代会に提案した。

※ 戸長役場(こちようやくば) 〃

明治五年に幕府時代の村役人の制度が廃止され、戸長・副戸長などと改称された。これによって北海道でも戸長役場が置かれたが、いろいろと問題

があった。明治一二年、北海道に郡区町村編制法が適用され、新法の下で戸長役場が設置されたが、一つの戸長役場で数か町村の行政を行っていた。当初、古平郡では沖村、歌葉村、沢江村・浜町、港町・入船町、丸山町、新地町、群来村の三区に三人の戸長を置いていた。戸長は戸籍・徴兵など国政の末端の事務まで行い、北海道では他府県と違って官選によることが多かった。明治三五年、古平郡は町村制の実施によつて二級町村(同三五年一級町村)となり、戸長役場は古平町役場となったが、道内では大正一二年まで、町村制も適用されなため、議会もない戸長役場が各地にあった。

浜中尋常高等小学校増築工事費募集方法

一、寄付金は各町村総代人において、各選出された町村に限りこれを募集すること

一、その町村の総代人が不在の時は、その隣町村の総代人が兼ねてこれに当たること

一、寄付金の募集が予定以上に達した時は、御聖影奉置所を建設し、なお余剰金のある時は、今後の校舍増築費として積み立てること

一、寄付は広く有志者に勧誘するにしても、これを強いることは出来ないし、経済的に困難な者にははたらきかけないこと

一、寄付金はすべて帳簿に寄付者の住所・氏名・身分と金額を記載し、これに押印させ、領収書を渡すこと

一、寄付金は期限内に帳簿と共に理事者に引渡すこと。理事者はこれに対し領収書を渡すと共に、かく寄付者の行賞を北海道長官に申請すること

一、寄付金勧誘についての主意書は別紙の通りで、これを寄附金帖の始めに記入しておく外に、勧誘の際には主意を伝えることが大切である 以上

浜中尋常高等小学校増築寄付金募集主意書

浜中小学校については校舎が狭隘のため、総ての未就学児童を収容することが出来ないでいる。私達総代人はその責務として、毎年この増築を計画し、今年度においてこの増築金二千四百四十円を支出することを議決した。しかし、今までの公的な借金の返還などで町村の負担額は

実に昨年の二倍にも達し、これ以上の負担は到底不可能である。ことから、止むを得ずここに有志者からの寄付金を仰いで、工事費の幾分かを補填しようとしている。願わくば公共の事業に賛成し、各自生活費を節約し、応分の寄付をされんことを望む。追つて寄付金に対してはその筋からの行賞もあることなので、身分などに関しても全て帳簿に記入されたい。

明治三十年五月

同町村総代人

氏 名

この計画は増築費の全額を寄付金により、寄付金は予定以上に達するといふ見込みから、御聖影奉置所の新築も計画に入れての募集であつた寄付金の総額については知る資料が無いが、工費二千五百六十円余りをもつて二教室を増築し、御聖影奉置所は九月、工費三百円で石倉の奉置所を学校裏手に新築し翌年二月竣工した。寄付者はそれぞれ次のように表彰された。

北海道後志国古平郡港中

幾井旧七

明治三十年七月後志国古平郡公立浜中尋常高等小学校 御聖影奉置所新築費トシテ金五円寄付候段 奇特二候事

明治三十年十二月八日

北海道庁長官從三位勲二等

男爵 安場保和

← 寄付者に対する表彰状

北海道後志国古平郡港中

幾井旧七

明治三十年七月後志国古平郡公立浜中尋常高等小学校 御聖影奉置所新築費トシテ金五圓寄付候段奇特二候事

明治三十年十二月八日

北海道廳長官從三位勲二等男爵安場保和

◇ 学務委員の任命

明治三十年十二月三日、古平郡浜中尋常高等小学校設置区域内学務委員に高野平治、幾井利三郎が小樽支庁から任命された。この当時の学務委員は、未就学児童を就学させるよう勧誘するのが主な任務であつた。(続く)

★国道の資格条件に

当てはまらない積丹道路

今まで余市・入舸線、岩内・入舸線は全額国費で維持され、従つて余市・古平間海岸道路工事も全額国費で北海道開発庁が施工して、この工事に付随して沖村・沢江間の道路拡幅工事も、古平川に架かる永久橋もすべて国

欠くことのできない連絡道路

この条件からみると、積丹国道はどの条項にも当てはまらないといふのが国側の主張であつた。そのため国道からは除外され、道費で支弁する道路となつた場合には、道としては従来のように工事を継続することはとても出来ないとはつきり言明していた。

住民の悲願

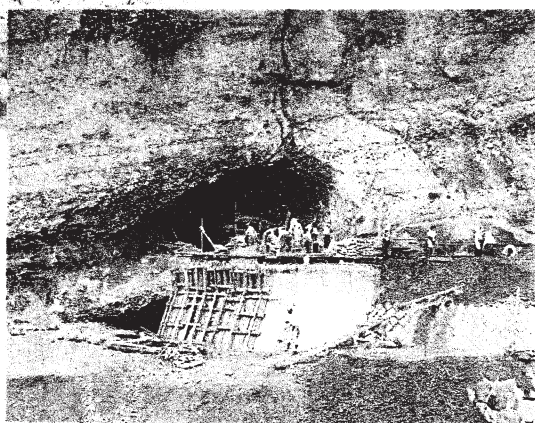
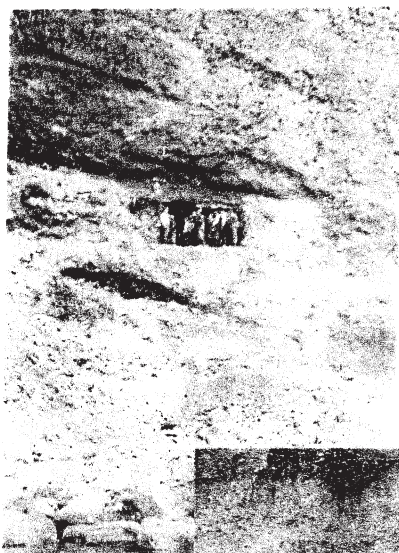
「陸の孤島」から開放

2

積丹国道開通

費で施工する予定であつた。ところが新しく制定された道路法では、国道はだいたい次のような条件を備えるものでなければならぬと規定されていたのである。

- 一、県庁(北海道では支庁)の所在地に直接通じる道路
- 二、重要な大港湾に直通する道路
- 三、国道と国道を連絡するのに



▼まず足場を造つてから隧道の掘削、当時は削岩機と発破(ダイナマイト)が主であつた

完全な道路があつてこそ積丹半島の開発が促進され、道路こそすべての産業、文化の基本であるだけにこれは重大な問題であつた。

★長年の悲願が実を結ぶ

先の国道期成会では自民党増田幹事長、野田建設大臣、池田大蔵大臣、建設省道路局長などへの陳情を通じて、それぞれ理解

ある感觸を得たものの、近く開か

れる道路審議会にすべてがかかっているとして、さらに各方面への積極的な請願を続けたのである。

その後の道路審議会において、ついに二級国道の認定が決定した。再び町弘報に目を転じると、「感激のこの五月十八日、血涙の請願遂に実を結ぶ、二級国道決定!」の見出しが躍っていた。そして伊藤町長の談話として、「(略)産業の発展も文化の交流も道路の完備が先決問題であり、本町の緒懸案事項も二級国道とする政令公布により、輝く将来を約束づけられた記念の五月十八日と言わねばならないと思います。しかしながらこのような結実は、町民各位の絶大な協力と、各官庁のご同情あるご援助の賜物でありまして、一年有半にわたる血涙の陳情、請願を想起する時、感激また新たなものがあります。この喜びこの感激は、各関係者、住民の喜びであると思うのであります。(略)」

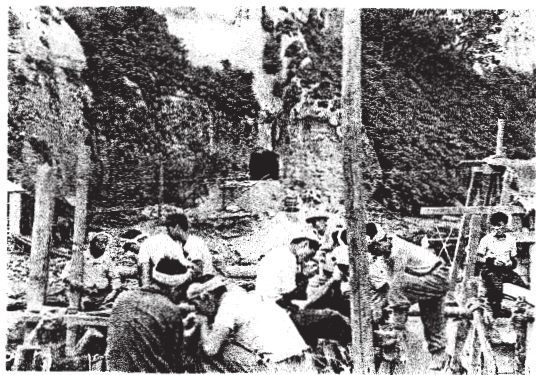
★第一関門の隧道完成

沖村セタカムイ岬を起点として

着工した海岸道路は、着工三年目の昭和二十六年一〇月、第一関門とも言うべき湯内までが完成し、そこで旧道とつながったのである。道路延長約二・八キロメートルの区間に四か所の隧道が貫通し、隧道の総延長は七六〇メートルで、道路の二七パーセントを占めた。

また、セタカムイ隧道からチャラセナイ隧道間は百メートルを超え、断崖の下を道路が通り、落石や雪崩にさらされての危険な難工事であった。

この区間の海岸道路の完成によ



り、それまでは沖村から山に入り、谷に沿って尾根を越え、湯内の海岸に出るまでの曲折する約八キロメートルの山道は、距離が三分の一に、時間は実に二〇分の一に短縮された。

余市山道の中でも最大の難所と言われた沖村・湯内間の道路の完成により、余市までの所要時間は大幅に短縮され、道路の利便性は格段に高まったのである。

★余市までの海岸道路案

海岸道路はさらに出足平（デタリビラ）現在の白岩町）まで道路が延長され、ここから山間部に入り、現在の道路に接続する計画になっていたが、現地の声として、このまま海岸道路を延長して欲しいという要望が高まり、開発局でも一時この案を検討したことがあったが、シリバ岬を抜けて余市に至るといふものだが、これによると出足平・余市間で八か所の隧道を掘らなければならず、長さが七百メートルという隧道もあり、当初、この区間の三億円の予算よりもさらに倍額程度に工事費が増えることが予想された。結

局、開発予算と予定道路との兼ね合いで、最初の計画通り工事は進められることになった。

★「陸の孤島」返上も

いよいよ間近

二級国道に指定されたことにより、それまで年度ごとの予算に頼

っていた工事も急ピッチで進められ、昭和三〇年七月には、湯内（現在の豊浜町）から出足平（でたりびら）白岩町）までの海岸道路約六・七キロメートルが完成し、残すところは、いよいよ出足平の区画整理と、梅川町入り口までの道路建設だけとなった。



→ すべてが人力に頼った当時の道路建設現場、道路護岸用石垣の採石
↑ 高さ百メートルを超える断崖絶壁の下での危険の伴う重労働、ホツとした憩いのひと時

一膳箸の船印

4

岡田家の繁栄と 北前船と古平

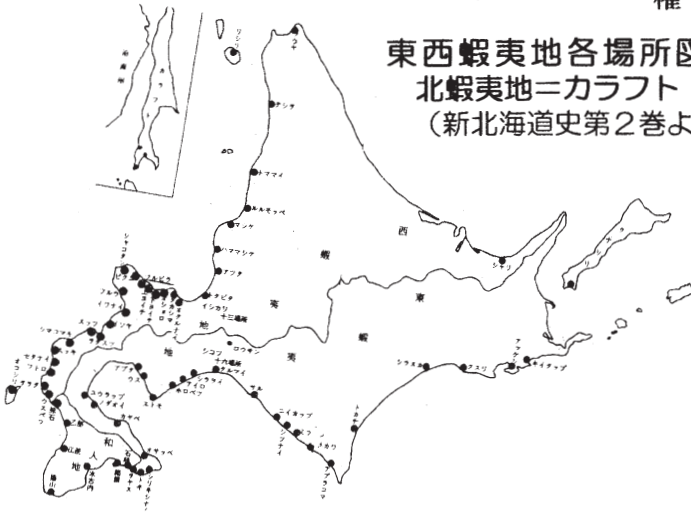
場 所請負人には、その土地でアイヌの人たちと交易する権利はあったが、土地やそこに住む人たちを支配する権利はなかった。

以前は鯨の豊漁に沸いた福山（現在の松前町）や江差周辺では、一七〇〇年代から鯨がとれなくなつたが、それまで漁が出来なかつた西蝦夷地（熊石より北）での漁獲（追鯨Ⅱおいにしん）が許されたので、道南地方から出稼ぎする者が多くなつた。

追鯨の出稼ぎには何人かが共同したり、家族で船を仕立て寝具や炊事用具を持参したり、春先の荒れる海上での危険をおかして北上した。

蝦夷地では危険な海の三険と

東西蝦夷地各場所図
北蝦夷地ニカラフト
(新北海道史第2巻より)



宝暦11年(1761)の記録では藩士200人りのうち場所持ちは59人とある。請負場所は、多いときは80数箇所あったという。
(当時のカラフト、現在のサハリンにもあった)

を納入すること
が出来なければ、
漁業に従事する
ことを許さなかつた。

場所内のアイヌや出稼人は知行主には何らの義務は無かつたが、請負人は知行主に対しては、一定の納税をする義務があつたほか、次のような任務を負つていた。

して茂津多岬・神威岬・雄冬岬が有名で、船乗りたちを恐れさせていた。ようやく目的地に着いても、そこには漁をするためのいろいろな制約があつた。

▼請負人の取り扱えること
一、蝦夷土人撫育(介抱とも言ふ)、即ち日用品の供給のこと
二、毎年二期(六月・十二月)運上金を納入する外、十一月中にその年の運上金の二分に当たる積み金をなすこと。
三、運上屋及び荷物庫修復または再築のこと
四、煎海鼠(イリコ)御用品など年々献納のこと
五、煎海鼠や干鮑など俵物御用品の漁獲の増加を図ること
六、官吏または警備の兵卒など通行の際は旅宿請負いのこと
七、公文書通送人の馬継ぎ立て(人馬を継ぎ代えて宿駅から宿駅へ荷物、文書などを送る)のこと
八、難破船のある時は救助のこと
九、外国船を見つけ次第急報すること
十、御備米は年々仕入れて積み替へること
十一、松明(たいまつ)三百本、草鞋(わらじ)三百足、年々新規準備のこと
十二、幕串(まくぐし)幕を張るときに立てる細い棒)百本(長

十二、幕串(まくぐし)幕を張るときに立てる細い棒)百本(長

さ九尺七寸)年々新規準備のこと

十三、臘臍(オットセイ)は捕獲次第上納、軽物(ラッコ・鷹の羽・熊の胆・熊の皮・シマネズミ・アザラシ・チョウザメなど)は、買い値で買い上げに應じること

右の条項のほか、年により付け加えられるものもあり、これを守らなければ処罰されることもあった。運上金の外上乘金(藩の御用船として荷物を輸送するとき管理、監督のために乗船したときの手当)、差荷金等の負担もあり、また藩主の参勤交代や、吉凶(松前藩としての慶事や凶事)等の費用に献金を命じられ、資本の薄弱な商人ではとうてい請負人になることなどは出来なかった。

天 明五年(一七八六)三月、松前を出立し、西蝦夷地を巡行した松前藩の家臣佐藤玄六郎の手記がある。

「松前志摩守へノ運上金ト唱へテ、利潤ノ内カラ金子ヲ納メル商家ヲ運上屋ト云ウ。

フルビラ運上屋一戸 海岸里数三里余リ (以下略)」

とあり、古平の海岸線を三里(約

一二キロメートル)と記している。

恵 比須屋岡田家は、有望な請負場所を持ち続け、慶応二年(一八六六)、古平場所を種田

徳之丞外二名に譲渡するまで、次のように各地で場所請負を続けていた。

岡田家の場所請負地

古平

一八六六

小樽内

一八六五

岩内・古宇

一七六四

磯谷

一八〇〇

寿都

一七九三

利尻・礼文、石狩のカバト、同ユウバリ、恵山、浦河、苫前、留萌、室蘭、幌別などがある。

(注・後志管内の分だけ請負い終期の年を入れましたが、その時期については、資料によって多少の違いがあることをご了承ください)

天保一五年(一八四四)、古平

場所の支配人であった城川長治郎が、厳島神社に石灯籠を寄進、翌年の弘化二年(一八四五)、古平運上屋では、浜町恵比須神社に御影石の鳥居を寄進している。

この年、蝦夷地の探検で有名な松浦武四郎が初めて蝦夷地に渡り、知床岬まで行っている。(続く)

◆◆ 編集雑誌 ◆◆

▽今年「少雪で温暖」という長期予報でしたが、地方によっては多少多めのところもあったようです。古平町はまあ少雪、そして三月初めは町内の排雪があり、春先の荒れ模様もなく、例年よりひと足早い春を迎えたかナ、という感じです。

▽昨年一二月頃にちよつと足を痛めてから、「せたかむい」も大分ご無沙汰してしまいました。「今月の分出ましたか?」とか、「どうなつたんですか?」などとお尋ねがあり氣を

もんでばかりいました。雪も解け、動きも良くなりましたので、精々挽回しようと思っております。一人でやっている仕事なので、ちよつとつまずくとそれが遅れに連なります。ご期待に応えられるようがんばりますので、愛読ください。

▽先月号で、釣り情報から「スケソ大漁」の記事を載せましたが、新聞記事で確かめたところ、メモをしていたのが間違っていたことが分かりました。改めて訂正いたします

「釣ったのはスケソ二〇尾……」と書きましたが、実は「クローラーボックス満杯、三五〇センチ級のスケソウ

を五〇匹以上、外に手のひら〜四〇センチ級のソウハチ五〇匹以上釣り……」というのがこの時の状況でした。場所は登別市の幌別沖で、抱卵スケソウが多かったとのこと。この辺の海域は昔からスケソウの好漁場としてよく知られています。

▽三月末頃、バスに乗るのに文化会館の裏から中央通りに出ましたが、夕食時ということもあつてか車だけで、人の通りはほとんどありませんでした。国道に面して商店の明かりの消えているのは怪しいものです。

十字街の三・高野名書店も、激動の戦後間もない頃から六〇年余りで閉店し、これは古平だけではなく、積丹半島に輝く文化の灯もこれで消えたこととなります。同じ浜町では逢見スーパの店舗周辺からも、人のさざめきが消えてしまいました。

新地町では二代続いた藤井時計店が廃業し、これで町内に四軒あつた時計店が後継者難や転居などですべて無くなつてしまいました。

時代の趨勢とは言いながら、馴染んでいたものが無くなるということは生活の変転です。昭和八年の町内戸別案内図を見ていると、大きな時代の変遷を感じさせられます。

カタクリ(堅香子)の花

大 澤 文 子

三月に入ると全国的に温暖の

日が続き、例年より十二、三日早く梅便りのニュースがきこえはじめた。ふと陽気に誘われ近くの丘の登り口に立つていた。見上げると丘の樹々たちは歯をくいしばり、厳冬の寒さにさからつて来たのであるうさまが、まざまざと分るような気がする。

特に落葉樹は枯れ果ててしまつたかに見える。空はよく晴れているのに風のいたずらか、耳もとに誰かがささやくような笹鳴りの音がする。時折り雪の小さな塊がパラパラ落ちる。

雪国はまだ寒い。だが春は遠くはない。春陽にむかい一番爽快な季を迎えようとしているはずなのに、ベッドからおりる時の下肢の不快感は何故? 足指に感覚がないのか、つけたはずの床につかず思わず転び、洋ダンスにつかま

る破目になる。

どうして? なんで? こんな言葉を発しても無駄なこと、右腕はつけ根のあたりからジンと電波が走り気だるい。目眩で目もあけていられない。仕方がないか、うん十年もつきあつた脚ですものネ。

もうこの辺で……どこかでだれかがつぶやく。おかげで川沿いの中村記念病院へタクシーで駆けこむ。こわこわ「画像診断」を受ける。

医師よりこまごまと指示を受けたが「異常なし」とのことだった。まったくはじめてのことだったので大変! 「生きた心地もなかった」……なんてその夜の日記に筆太々と記した。

また、今年は特に昨年以上の積雪がわが庭を襲い、おまけに屋根の雪とベランダ側の大雪がつながり、昼なお暗く電灯を灯す

日々が続いた。

三月に入り漸く日脚も伸びべランダ側の雪もやや解け、明るくなつた居間にホッとしてペンをとつた。へそいえば何十年前か前であつたが福岡の次男夫婦から「福岡の梅を見に来ないか」……と、誘いの電話が届いたのも今頃だった。

早々に夫と共に出かけたあの頃のことを思い出し涙するひと夜だった。あの時、子らに連れて行かれたのは大宰府の天満宮だった。かの有名な菅原道真公を慕い飛んで来たという謂れのある『老木飛梅』が、大宰府の天満宮の境内にある。低い木の柵に囲まれ、伸びのびと青空に向かい咲き誇っていたのだ。あの時、私はそつと『飛梅』の肌に幾度もふれてみた。あの時の感触は今でもまざまざとよみがえってくるのだった。

その後、次男夫婦から「白梅」の鉢が送られて来たが、現在にはわが小庭の積む雪の下辺に春くるを待ちわびているのであろう。

もしかして……「あの飛梅」の子孫かな? なんて、他愛のないことを思い雪解けを待ち侘びている

日々である。

朝のコーヒーの香が身の内を過ぎる頃、すべてを忘れ、昨夜認めておいた三通の郵便物を急ぎ朝の便で届けようと、滑る路面を気にしながら玄関に立っていた。

ふと仲よしの友がいつの日か「そろそろ杖をつかつてみたら?」と親切に誘ってくれたっけ。

「折りたたみ式のいいものもあるよ」と教えてくれた。

「ああ私もそんな年齢になつたんだなア……」一瞬淋しい思いにかられたが……、仕方のないこと。

「よし今度! 一番丈夫なすてきなのを求めようか」……と、心に決めた朝だった。

春待つ心に街を歩めば春爛漫の店みせ、だがいつの日か海沿いの崖下に可憐なカタクリの花を見つけた時、冬ごもりから開放された思いにかられうれしかったことを忘れはしない。

カタクリの花は百合科の多年草、昔から人々に愛され、カタクリ(堅香子)の名でも知られ、多くの歌人からも歌われている花である。

ちなみに花言葉は「初恋」とか。

悠

雜詠 〔二月号〕
主宰 水見壽男

雲迅し一帆速し葉月潮

越野清治

星月夜間宮海峽遙かなる

逃げ足の速き白雲秋涼し

新涼を呼ぶ燈台の火影かな

星飛んで波の荒さのよもすがら

潮騒や朽ちし牛舎や芒原

寺の鐘韻々として秋彼岸

まどろみの中に入り来る虫の声

握られし手の温もりや葛の花

月戦下句集漣々黙し読む

海暗く月皓々と照る奇岩

沖風に乗って蜻蛉の続々と

暗き海満月こぼす金の波

静かなる青き水面に秋夕日

番屋跡背丈ほど伸ぶ秋の草

故郷の木の香漂ふ月の道

歩を止むる夕空澄みし残暑かな

【句評】

山口悦子

越野敏雄

高橋重子

空高く野山に遊ぶ九月かな

外山俊久

肩に來た蜻蛉がそつと告げる秋

風もなく空に群れなす秋茜

父と子が波とたはむる浜の秋

藍はわが想ひの潮月のぼる

堀典子

露しとど明るく光る朝かな

三日月の研ぎすまされし形かな

倒るるは倒るるままに杜鵑草

一朝は鮭一色の糶に湧く

本間寿昭

鮭荷揚げ終らぬままに糶の立つ

古老の眼鮭解禁の海に立つ

風さへも色に溺れし花野かな

渡辺嘉之

海霧分けて戻りし船の灯のにじむ

徐々に來て急に色増す海霧の岬

鯛雲心地よき空日本海

日本海我が物顔に鮭來る

室谷弘子

仲秋の風をはらみし岬の波

仲秋や波も一氣に躍り立つ

群青の海が呑み込む虫の声



【三〇】

— 一月号 —

波音の夜をゆさぶる冬の町 高橋重子

新海苔を煮る香外まで漂へり

追憶は淋しきものか秋の月 外山俊久

庭に立ち雲の流れに秋を知る

立冬ときけば思ふや氷点下 堀典子

息白く輝ひてゐる冬の朝

大時化の続く岬に鷹見せず 本間寿昭

鷹一つ化身の岩を座としたり

木枯のくぐり抜けたる橋の下 渡辺嘉之

木枯に走らされたる影いくつ

凧や行き手阻みし岬の波 室谷弘子

凧の過ぎし岬の波揺るる

先を行く自転車の灯り霧の濃し 仲谷比呂古

つい地味な色に手を出すセーターに

しろがねの波の捲れや今朝の冬

越野清治

稜線を迂る雲あり紅葉散る

石倉の栄華は昔秋惜しむ 斉藤波留

潮風の荒るる積丹枯急ぐ

山深し老爺ほろ酔濁酒 山口悦子

風も無く大綿白く群れて飛ぶ

達磨忌や面壁九年禅が道 越野敏雄

木の葉舟渡河の達磨や朱の衣

秋天や祝儀花束受くる幸 大和田絵伊

秋霖に濡るるすべなし我が身かな

短歌

古平岬短歌会

日本ハム優勝パレード十万の着ぶくれし人ら天までの声

池田 テル

冬枯れの木立をゆらす寒き朝を不況の風は町をかつぽす

金子 寿子

午後からの雪の降る中出かけ来て寒さも忘れ鉢花眺む

坂本 信子

ふたつみつ浮く磯舟の音もなく動くともなく浜は日暮るる

鈴木 時子

一年のあまりの速さ振り返り新しき年はゆるりをねがふ

田中 香苗

寮母として共に過ごしし寮生は退職せし今も訪れくれる

玉谷 美都子

漁なくもことしの鮭漁終了す事故なく感謝と日誌にするす

丹後 初江

赤白の花びら縮れしシクラメン孫のプレゼント結婚記念日に

寺田 カツ子

夕暮れを行くバス窓に映れる灯工事を照らして山に連なる

仲谷 喜美能

杭をもてかこふ一位の赤き実をふふめば甘し冬めぐり来ぬ

東 美知

初冬の大木に絡む蔓擬枝に実のはぜ鮮やかなる色

堀 典子

俳句

古平俳句会

石狩の平野まさぐる秋の風 越野清治

落葉掃きはき集めても集めても 斉藤波留

車椅子今日を限りと小春かな 山口悦子

菩提寺の鐘声到る報恩講 越野敏雄

秋の暮父母亡き実家他人めく 大和田絵伊

冬紅葉雨降る程に鮮かに 高橋重子

秋の川手掴みできる鮭の群 外山俊久

つきぬけて虚しき冬の空なりき 堀 典子

漁夫一人冬凛々と素手の網 本間寿昭

灯台の灯の折れやすき冬の浜 渡辺嘉之

冬の時化嘆く船頭腕を組み 室谷弘子

小春日や小犬に言葉かけながら 仲谷比呂古

古平町史年表

昭和35年(1960) ～ 続き

4/1: 札幌地方裁判所民事調停委員に越中庄七が委嘱される

同: 小樽職業安定所が、毎週2回巡回職業相談所を開く

5/1: 古平高等学校が校章を制定する

5枚の葉と3個の花を組み合わせたスズランは、母なる大地、わが北海道の自然を、そして左右の波形はわが郷土、古平をうるおす日本海を象徴している。このすばらしい環境の上に、強くたくましい古平高校のより一層の発展を願う気持ちをこめて「古高」の2文字がデザインされている。

5/7: 北海道開発局長猪瀬寧雄が古平漁港視察のため来町する

5/17: 古平町役場が庁内執務についての『反省十一章』を作成し吏員に配布する

同: 古平交通安全協会では、道内の交通安全週間に協力レトラック、三輪車などで町内をパレード、「交通安全」を呼びかける

5/-: 稲倉石小中学校PTAの寄贈による桜の苗木をPTA会員と児童・生徒らが校舎周辺に植樹する

同: 神威岬灯台が無人化される(明治21年、道内第3番目の灯台として開設された)

5/19: 後志の消防施設状況が新聞に報道されたが、古平町の消防施設は上位にランクされる

6/1: 札幌～美国間に中央バス(株)が定期観光バスを運行する

7/21: 地下資源調査所職員が、稲倉石地区にある福岡鉱山付近の鉱物資源調査のため来町する

8/1: 浜町で真性小児麻痺患者が出たため付近を消毒する

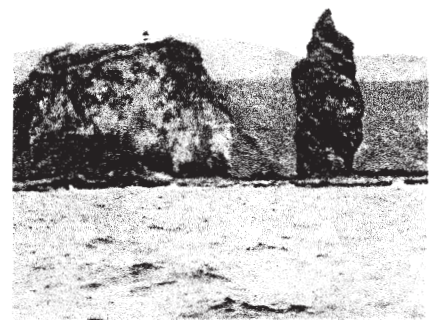
8/4: 稲倉石小中学校が2教室を増築する

8/5: 古平母子会が結成され、初代会長に富田恒が選出される

8/10: 古平小学校同窓会が会誌『白鳥古丹』を創刊する



↑ 後に古平交通安全協会が、浜町まつや旅館前に交通安全PRの大看板を立てる。



↑ 海上遥か、伝説の神威岩付近から神威岬灯台を望む